

家の鍵

2006(平成18)年3月8日鑑賞(東宝東和試写室)

★★★



監督・脚本＝ジャンニ・アメリオ／原作＝ジョゼッペ・ボンティッジャ／出演＝キム・ロッシ・スチュアート／アンドレア・ロッシ／シャーロット・ランプリング／ピエルフランチェスコ・ファヴィーノ（ザジフィルム配給／2004年イタリア映画／111分）

……父と息子の絆をテーマとした映画は数多いが、このイタリア映画は16歳の障害児が主演。それまで関係を断っていた若い父親は、今あらためて彼をどう理解し、今後どう向き合っていくのだろうか……？ そして『家の鍵』というタイトルに込められた思いとは……？ 思わずフーとため息が出ることを覚悟の上で、真剣に鑑賞しなくては……。

🎬 身障者を主演とした名作あれこれ……

身障者を主演とした映画でこれはすごいと思ったのは、韓国映画の『神さまこんにちは』（87年）（『シネマルーム2』232頁参照）と『オアシス』（02年）（『シネマルーム7』177頁参照）。そして安楽死をテーマとしたハリウッド映画である『海を飛ぶ夢』（04年）（『シネマルーム7』197頁参照）。私がこれらをすごいと思ったのは、何の障害もない役者たちが演技として身障者の役を見事に演じていること。とりわけ『オアシス』では、美人女優のムン・ソリが「アーウー」ばかりのセリフ（？）をしゃべりながら、脳性マヒの女性を、顔をゆがめ、手足を引きつらせながら文字どおり身体で演じていたのは衝撃的だった。

🎬 16歳の主人公はホントの障害児

ところが、何とこの映画に登場する16歳の主人公パオロを演ずるアンドレア・ロッシは、正真正銘（？）の障害児であるうえ、映画には全くの素人とのこと。彼の本当の病名はわからないが、その姿はスクリーン上で観ているだけでも痛々し

いもの……。したがって、映画でここまでやっていいのかという疑問も少しは……？

リハビリ施設での厳しい歩行訓練を目の当たりにして、当の本人はそれに耐えているのに、父親のジャンニ（キム・ロッシ・スチュアート）が「もうやめてくれ」と叫び、パオロを抱きしめてリハビリを中止させるシーンを観ていると、私だってきっと同じ気持になるだろうと思ってしまう。しかしそれは所詮自分の弱さを示すだけのもので、リハビリの指導員が言うように、子供の自立を阻む最大の要因は両親の愛情なのかもしれない……。

家の鍵とは……？

この映画のタイトル『家の鍵』は、かなり意味シンなもの。パオロが持っている家の鍵は、ローマの自宅の鍵。自宅でもオフィスでもあるいは彼女の部屋でも、鍵を持たされるということは、それだけ信頼されていることの証し。つまり、いつでもその鍵を使って、家の中、部屋の中へ入って行くことがオーケーとされているわけだ。そういう意味において、パオロは自分の家の鍵を持っていることが誇りだった。そして、「ジャンニの家、ぼくの鍵であけられる？」と尋ねるパオロに対する、ジャンニの答えは……？

2人の最初の旅は？

映画の冒頭は、ミュンヘン駅のカフェ。ここでジャンニはパオロの伯父さんアルベルト（ピエルフランチェスコ・ファヴィーノ）に呼び出され、ベルリンのリハビリ施設にパオロを連れて行くよう説得されるわけだ。したがって、ここから始まる2人の最初の旅は、ミュンヘンからベルリンへの列車の旅。奇妙な杖をつきながら歩くパオロは、朝起きると食堂車に1人座ってゲームに夢中。その姿を観ていると、その世話は大変だと思わず身構えてしまいそう。さらにパオロが歩く時、ジャンニが手を貸そうとすると、パオロは「1人でできる！」ときついお返し。先が思いやられる2人の旅立ちだ……。

リハビリ施設でのさまざまな出来事……

ベルリンのリハビリ施設でジャンニが出会ったのが、身障者の娘を持つ母親の

ニコール（シャーロット・ランプリング）。ジャンニはこのニコールから多くのことを学んでいくのだが、ここはまだ序の口。今後の展開に注目しよう。

他方、パオロの手帳に貼られたガールフレンドの写真を見たのは、リハビリ中の宿泊先であるホテルの中。彼女はクリスティンという名前で、ノルウェーに住んでいるとのこと。ホンマかいナ……？ それをパオロから聞いたジャンニは、パオロのためにクリスティンへのラブレター（？）をEメールで……。

1人冒険の旅は……？

病院主催のフェスティバルで発生した騒動は、パオロ単独の冒険の旅。たしかに奇妙な杖をつきながらも1人で歩けるのだから、ジャンニが目を離したスキにどこかに行ってしまう危険性はもともとあったもの……。ジャンニがニコールと話している間にいなくなったパオロは、何と1人で電車に乗って終点を越え、車庫までの1人旅……。心配し、捜し回った挙げ句、やっと何とか事なきを得たものの、こんなに振り回されたのではジャンニとしては、一体なぜ……？そしてやってられないヨ！ と思うのは当然。しかし、一方のパオロは……？

ニコールとの会話から学ぶこと……

この映画はほとんどがジャンニとパオロとの2人芝居だが、ジャンニに対して大きな影響を与える女性が、身障者の娘を持つ母親のニコール。

「娘が死んでくれれば」と思ったことがあると正直に話すニコールの言葉は重いものだし、自分の人生をすべて障害児の娘とともに生きていく決意をしているその生きざまもすごいもの。したがって、そんなニコールとジャンニとの会話は含蓄あるものばかり。

リハビリ施設を逃げ出した後は……？

さらに、パオロとジャンニとの真正面からのぶつかり合いは、ホントに考えさせられるテーマばかり。

映画の最初では、頼りないフワフワした若い父親だったジャンニが、ラストに近づくにつれて急激に成長（？）していることがよくわかる。

そんなジャンニが向かう先はノルウェー。それは、パオロのガールフレンドのクリスティンがノルウェーに住んでいるから……。今そんな旅に出ようと決意するまでに、ジャンニがパオロやニコルから学んだことは……？

映画のラスト近くになると、いつの間にかパオロがいつも使っていた杖がなくなっていることに気づくはず。ジャンニはどのような決意を込めてこの杖を海に捨ててしまったのだろうか？ そしてこの杖に変わる新たなパオロの杖になるものとは……？

じっと観ているのはかなりしんどい映画だが、とにかく考えさせられることがいっぱい。たまにはこういう「重い映画」を観て、みんなで語り合う素材にしなければ……。

あるドクターのコラムを読んで

私がこの映画を観た3月8日の日経新聞夕刊には、偶然「あすへの話題」というコラムで、聖路加国際病院副院長の細谷亮太氏がこの映画を取りあげていた。そのタイトルは「障害」と「個性」。細谷氏の視点は医者らしく、パオロの病状は脳性マヒに加えて高機能自閉症スペクトラム、いわゆるアスペルガー症候群のように見えたということ。そしてこのような精神障害の場合、どこまでが「個性」で、どこからが「障害」であるかの判断が難しいという前提の下で、吉田友子先生の『高機能自閉症・アスペルガー症候群・「その子らしさ」を生かす子育て』という本を紹介し、その中に書かれている、「その子の行動のほほえましさをいとおしく思い、ユニークさに感心する時、その子の特性を生涯続くその子らしさ、個性として味わっているとの意見が、まるまるなるほどと思えるような味わい深い映画だった」とまとめている。

たしかにそう言われればわからないことはないが、そんな風に思えるまでには、一体どれほどの修業が必要なのだろうか？ また、医者として一般論としてこのように解説することはできても、いざ自分の息子がアスペルガー症候群になったとき、彼はホントにそのように思うことができるのだろうか……？

2006(平成18)年3月9日記